

## **Online Collaborative Learning in a Multicultural Environment**

A Case Study on Shared Campus Summer School "Streets" in 2022

FUJIEDA Ayako

AMO Kae

---

Since 2020, the spread of the new corona virus has led to restrictions on international human interactions. Universities have also been facing significant restrictions on accepting international students and sending students abroad.

As online learning became more widespread, digital courses at overseas universities and remote classes with overseas students while in Japan has emerged as the alternative to face-to-face teaching. Less expensive and time-consuming than actual travels, these distance learning and exchange programs solutions also lower the hurdle for students unfamiliar with foreign countries; providing them with an opportunity to take their first steps.

This paper focuses on the 2021 Shared Campus summer school program "Streets" as a case study to show: (1)how this intercultural learning program was planned and implemented through online collaboration, (2)how we assisted students worried about communicating in English, and (3)analyze what learning outcomes and experience the students got from such a program. We will examine the practices and possibilities of distance learning using the University online infrastructure, and discuss what kind of educational programs can be designed and carried out to build collaboration in an online multicultural environment.

# オンライン多文化環境の協働における学び

## ～2022年Shared Campusサマースクール 「Streets—街路で考える—」を事例として～

藤 枝 絢 子 FUJIEDA Ayako  
阿 毛 香 絵 AMO Kae

### 1. はじめに

2020年にはじまった新型コロナウイルスの拡大により、国際的な人の交流が制限され、大学においても留学生の受け入れ、学生の海外派遣が大幅に制限されることとなった。一方、デジタル技術を活用したオンライン教育が浸透するなか、対面の交流の代替として、オンラインを介して日本にいながら海外の大学の授業を受講する、海外の学生とオンライン交流するなど、新たな学びの方法が開拓されてきた(注1参照)。このようなオンラインでの学習や交流機会は、実際の渡航に比べ経済的や時間的な制約が少なく、また海外に馴染みのない学生にとってもハードルがさがり、第一歩を踏み出す機会となる。また、多地点からの接続、多様な背景を有する学生の参加が可能であり、新たな多文化環境での学びの場が創出される。オンラインを介した海外の大学との共同プログラムは、「対面」「渡航」が中心となっていた教育プログラムに、新たな可能性を示すものである。しかしながら、これまで活動経験に基づきその有効性は報告されているものの、新型コロナウイルス流行後に着目され始めたばかりで未だ発展段階であるといえる。よって、本稿では、制作活動に関心の高い学生が多い本学において、多文化環境における協働に着目し、その実践経験を共有するとともに、その可能性や限界を検討したい。今後もデジタル技術を活用した教育は加速すると想定されるなか、こうした知見を蓄積し共有することが、多様化する教育環境の向上に寄与すると考える。

本稿では2021年の夏に筆者らが本学で実施したShared Campusのサマースクール「Streets—街路で考える—」を事例に、①オンラインでの協働を促進するためにどのようなプログラムを企画運営し、ど

のような工夫をしたか、②本学学生に対してどのようなサポートを行ったか、③参加学生の学びと成長はどのようなものであったかを示す。サマースクールの事例を通し、オンライン多文化環境における学びの実践と可能性を検証し、オンラインにおける多文化環境の協働を構築するために、どのような教育プログラムが設計できるのかについて考察する。

### 2. サマースクールの概要

#### 1) 背景

本サマースクールは2020年に京都精華大学が創立メンバー校として加盟したShared Campus(以下、SC)の活動の一環である。SCは、ヨーロッパとアジアの8の芸術系高等教育機関が参加する国際的な教育連携、研究ネットワーク、共同制作の新しいコラボレーションプラットフォームであり、社会課題解決にむけて国境を越えた学術的交流を生み出すことを目的に設立された。SCでは、テーマ別に5のフォーカスグループ(「批判的エコロジー(critical ecology)」、「文化/歴史/未来(Culture, History and Future)」、「ポップ・カルチャーズ Pop Cultures」、「社会変動 Social Change」、「ツールズ(Tools)」)を形成し、共同で教育研究活動を展開している。

毎年、教育事業として、各フォーカスグループで、具体的なテーマを設定し、メンバー大学の学生たちが参加するサマースクールを開催している。著者らは「社会変動」グループによる2021年度のサマースクールの企画・運営に携わった。「社会変動」テーマグループとは、芸術的なアプローチを通じて、地域やコミュニティとの関わり方や社会変革などのテーマに取り組む方法を模索することを目的としており、毎年のサマースクールもこれに沿った主題を

設定している。

## 2) 目的

「社会変動」グループでは、「既存の概念や権力、社会の構造から自由になろうとする動きや葛藤」を「脱植民地化 (Decolonization)」と表現し、サマースクール全体を通じて取り組むテーマとして設定した。これとの関連から2021年度のサマースクールでは「ストリート (Streets)」を主題とした。主題である「ストリート」は、公共空間であり、権力関係が表象される場でもあり、またそれに対する様々な反発や主張が行われる場でもある。こうした表現の場である「ストリート」を舞台に、参加学生たちは自由な発想で自らの身体性や公共空間へのかかわりを考え、公共空間がどのように利用されているかを理解することで、個人制作、および数人のグループ制作として表現することを目的とした。

## 3) 運営チーム

本サマースクールは、3大学 (京都精華大学、香港浸会大学、チューリッヒ芸術大学) がホスト大学となった。香港浸会大学でインテリアデザインを専門とする Evelyn Kwok、チューリッヒ芸術大学で舞台芸術とデジタル表現を専門とする Rada Leu、本学からは、阿毛香絵、藤枝絢子、Jennifer L. Teeter の合計5名の教員が主なメンバーとして企画運営に携わった。2021年度のサマースクールは全オンライン実施と決定したため、教員同士も顔合わせ当初より全てオンラインで打ち合わせを行った。

## 4) 参加学生

サマースクールはSCの提携校の学生に対して参加者を募集した。その結果、61名の学生たちから応募があり、選考の結果7カ国8大学から33名が参加した (表1)。学生の専攻分野は、ビジュアルアート、クリエイティブ・メディア、デジタルメディア、インスタレーション、ファイン・アーツ、建築、ファッション、グローバルスタディーズなど、芸術を中心としつつ、多様な分野を専攻する学生が参加した。また、留学生も多く、アジアやヨーロッパだけでなく、アフリカや中南米など出身地も多岐に渡った。本学からは、デザイン学部ファッションコース1名、国際文化学部グローバルスタディーズ学科2名、芸術学部造形学科映像専攻2名の計6名が参加した。

表1. 参加学生の内訳

所属大学	人数	身分	人数
ロンドン芸術大学	9名	学部生	17名
チューリッヒ芸術大学	3名	大学院生	16名
ラサール・芸術大学 (シンガポール)	4名	合計	33名
香港城市大学	7名		
香港浸会大学	2名		
国立台湾芸術大学	1名		
東京芸術大学	1名		
京都精華大学	6名		
合計	33名		

## 5) プログラムの構成

2021年8月9日から8月27日にかけて3週間のプログラムを設計した。時差を鑑みてオンラインで接続する時間は日本時間の17時から20時と設定した。個人制作とグループ制作を2軸とし、第1週はガイダンスとグループ制作に向けての準備、第2週はグループ制作の作業、個人制作と発表、第3週はグループ制作の仕上げ、最後に発表の機会を設けた。オンライン接続する時間の活動は、オリエンテーションやグループワークのように全体で接続する時間 (A)、全体で接続し講義に参加する時間 (W)、個人・グループでの作業 / 個別相談の時間 (S)、発表会 (P) を組み合わせたものとした (図1)。次章にて、プログラムの詳細を記す。

STREETS SUMMER SCHOOL SCHEDULE 9-12 August, 2021					
CONTACT TIME + TIME ZONES! Please note that all the sessions are 3 hours start and end at (unless otherwise specified) BST (London): 09:00-12:00 CEST (Zurich): 10:00-13:00 HKT (Hong Kong): 16:00-19:00 JST (Kyoto): 17:00-20:00					
	MONDAY	TUESDAY	WEDNESDAY	THURSDAY	FRIDAY
WEEK 1	9 (A) HELLO! Introduction + Overview Ice Breaking activity Part 1	10 (W) GUEST SPEAKER Shawna Carroll 17:30 JST Ice Breaking activity Part 2	11 (A) Introduction of Research Themes Theme Explorations + Group Forming	12 (W) GUEST SPEAKER Michael Leung x Floating Projects 16:00 HKT	13 (S) SELF-DEvised TIME
WEEK 2	16 (A) GROUP WORK Share progress with group and mentors	17 (W) GUEST SPEAKER Oussoubi Sacko 18:00 JST	18 (A) GROUP WORK Share progress of project 2 with group and mentors	19 (S) SELF-DEvised TIME	20 (P) PRESENTATIONS Project 1
WEEK 3	23 (A) GROUP WORK Share progress for project 2	24 (S) SELF-DEvised TIME	25 (W) GUEST SPEAKER Kyoto Graphy 18:00 JST Mentors can give group feedback if requested before guest speaker	26 (S) SELF-DEvised TIME for finalising project 1 + project 2	27 (P) FINAL PRESENTATIONS Project 2 15 mins x 8 groups Submission of project 1 + project 2

全体で接続する時間 (A)、全体で接続しワークショップ・講義に参加する時間 (W)、個人・グループでの作業 / 個別相談の時間 (S)、発表会 (P)

図1. サマースクール「Streets」の全体スケジュール

## 3. プログラムの実施と工夫

上記のプログラムを企画運営する上で、担当教員が工夫した点について、1) 個人制作とグループ制作、2) ゲスト講演の企画と運営、3) オンラインツールの活用の3点から示す。

### 1) 個人制作とグループ制作

サマースクールでは、個人制作とグループ制作を





図2. 学生によるMiroへの書き込み



図3. 一同に介してオンラインワークショップ

目的に応じて複数のオンラインツールを活用した。全体的なリアルタイムでの接続は Zoom を活用し、オフライン時のコミュニケーションのツールとして Miro ボードや、インスタグラム、LINE や WhatsApp などの SNS、コミュニケーションツールを活用した。

### Miro

Miro はオンラインのホワイトボードであり、ビジュアルコミュニケーションツールである（注2参照）。それぞれの学生が自らの興味のあるサブテーマに関して、興味や気づきなどを自由に書きこみ、それぞれのアイデアやキーワードなどが視覚化されたことにより（図2）、サブテーマに関する理解が深まると同時に学生同士のディスカッションの話題や交流のきっかけともなり、グループ分けに役立てることができた。

### インスタグラム

サブグループの雰囲気盛り上げ、個人の参加を促すため、サマースクール全体でインスタグラムアカウントを作成した。上で述べた8のサブグループでそれぞれ数日間アカウントの運営を担当し、サブテーマに関連する写真や画像、音声などのアップロードを自由に行えることとした。学生、教員がワークショップの様子やテーマ、作品に関わる画像、ストーリーズを利用した質問の投稿などを活発に投稿する様子が見られた。

### その他のコミュニケーションツール

上記で述べた通り、Zoom と Miro、インスタグラムが本プログラムの中心的なコミュニケーションツールであったが、それぞれのサブグループでは、グループ制作を進めるなかで、画像や映像を送り合ったり、進捗を報告したりするため SNS を活用して頻繁に連絡を取り合っていた。国ごとに使われるアプリが異なるなか、海外の学生とは WhatsApp、日本人同士は LINE を利用して、コミュニケーション

を取ることが一般的であった。理解できない内容については、それぞれが自動翻訳アプリなどを用いて英語を翻訳し、理解しようと務める様子も見られた。

## 4. 本学学生へのサポート

SC のプログラムは、基本的に英語で実施された。グループワークを前提としているため、テーマを理解しグループメンバーとの対話や協働が不可欠であるため、英語でのコミュニケーション能力が求められる。また本学での日常の教育環境とは大幅に異なるため、学生が適応し、充実した学びを得るために教員のサポートが不可欠であった。本学の学生に対してどのようなサポートを行ったか、語学サポートを中心としつつ全体の流れについて振り返る。

### 1) 事前準備

2021 年度に実施された SC のサマープログラム（「テレプロビゼーション (Teleprovisation)」と「ストーリーツ」）に参加した本学の担当教員7名で、週1回対面で学生の事前準備をサポートする時間を設けた。まず、学生募集の行われる4月より学生の応募書類作成のサポートを行った。応募書類（自己紹介、ポートフォリオ、カバーレター）は、ほぼ学生1人につき教員1人が必要書類の作成を手伝い、英語による自己紹介文やポートフォリオ、カバーレターの作成を合同で行った。学生はカバーレター作成経験がないため、自らの関心や経験をどのように文章化できるかをともに検討し、英語への翻訳を手伝った。また、ポートフォリオに関しては、芸術系の学生が作品を容易に準備できたのに対し、国際文化学部学生はポートフォリオの作成経験がないため、そのコンセプトづくりからサポートをおこなった。参加が決定した後は、自己紹介や自らのことについて英語でよりアクティブに表現できることに重点を置き、実践的な練習を行ない、英語でのコミュニケーションのスキルアップや苦手意識を軽減することを目指した。

## 2) 実施中

サマースクール実施中、特に第1週目は英語でのコミュニケーションに不安をもつ学生たちがより安心できる環境を作るため、最初の2日間は対面で教員と学生が集まり一緒にZoomに参加する場を設け、希望する学生が対面で参加できるようにした(図3)。会場は1日目、2日目で変えたが、特にグループワークがある2日目はブレイクアウトセッションの間は自分のパソコンから会場にて各自のパソコンから接続できる空間を確保した。ブレイクアウトセッションの間も、教員が各学生を訪れ個別ディスカッションができていたかの確認とフォローアップを行った。また、全体セッションが終了したあとも、会話についていけたか、どのように感じたかなどを皆で話し合う時間を設けた。学生からは、初めての英語のコミュニケーションで緊張したため皆で集まれて良かったという感想が多くあげられた。また、第2週、第3週にも全体で集まる日程を週1~2回のペースで設けると同時に、ワークショップやセッションの前後に必要なに応じて対面での個別相談の時間を設けた。学生と教員でSNS(特にLINE)を通じて常に連絡をとることにより、不安がある学生が常に教員に連絡することができる体制を整えた。

加えて学生にとって英語では内容の理解が困難と思われるワークショップや講演では、教員が学生とあらかじめ共有したGoogleドキュメントに同時進行で英語での会話の書き起こしを行い、学生が文字で会話内容を読みながら参加できるようにした。なかには共有された英文を翻訳アプリを使って理解しながら聞く学生もあり、文字として可視化されたことでよりスムーズに英語の発表内容が確認できたという声が多かった。特にゲストのワークショップなど学生にとって内容が難しい場合にはこの手段が有用であった。

## 5. 本学学生の経験

ここでは、本プログラムに参加した学生たちが、個人とグループ制作において、どのようにテーマを解釈し、作品制作をすすめ、作品をつくりあげたかを示す。

### 1) 個人制作

「6枚綴りの何かをつくる(Reflective 'Postcards)」では、各国の学生たちがそれぞれ「脱植民地化」や「ストリート」というテーマを解釈し表現すること

で作品制作を行なった。本学学生Aは、市場経済、キャピタリズムと商品化される身体に対する批判的な視点を表現した作品を制作した(図4)。広告で扱われる様々な女性の「顔」を何枚も重ねることでその類似と同じような商品化され定型化された「美しい(とされる)」顔についての批判的な視座(図4-①)、陳列棚に並ぶ同様の商品などで大量生産と消費による植民地化(Colonization)への批判を込めた作品(図4-②)であり、テーマの解釈、ビビッドな色合いなどグラフィック表現の面白さもあわせて評価された。

また、個人作品は学生自身の作品制作とコミュニケーションに関する成長点も見られた。本学学生Bは、個人制作のフィードバックで、自らの個性を自由に表現できない窮屈さを、様々な髪の色をした同様の若い女性の映像6枚で表現していたが、メッセージが伝わりにくいという批評を受けた。最終提出の作品では、全く作風を変え、目、鼻、口、など顔の異なるパーツをコラージュした異なる6つの映像にそれぞれ本人の作成した詩と、音楽を付けたものとなった(図5)

それぞれの個性やアイデンティティがありながらもお互いを「好き」になれる、という意味でも、社会的なステレオタイプから自由になるという意味で全体テーマである「脱植民地化」を表現できていたと評価された。

本学の学生にとって「脱植民地化」というテーマは身近でなく、ほとんどの学生がどう理解しどのようにアプローチするか苦戦した。しかしながら、本学の学生同士や教員との対話、海外の教員やその他の学生からフィードバックを得るとともに、海外の学生の作品やテーマの扱い方から刺激を受け、学生が自らの作品をより良いものにする姿勢、意欲的に作品制作と発表に取り組む姿勢がみられた。

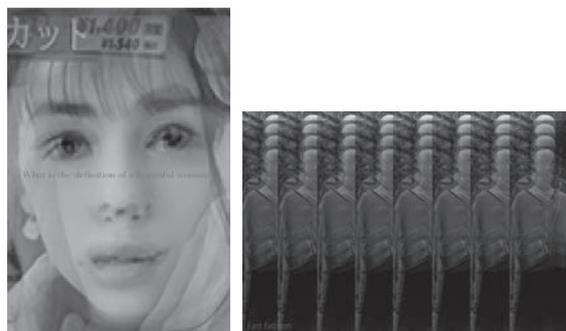


図4. ①「美の基準」(左)、②「ファスト・ファッション」(右)  
(本学学生Aによる個人制作6点作品のうちの2点)

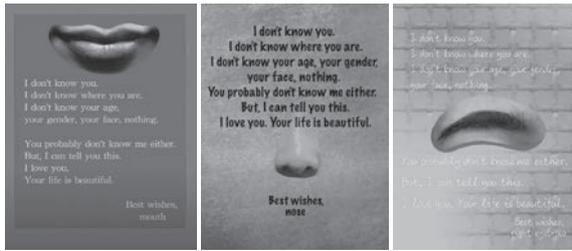


図5. 本学学生Aによる個人制作「Sending Postcards to Strangers」6点作品のうちの3点

## 2) グループ制作

グループ制作では、海外の学生と4～5名程度のチームを作り、遠隔でコミュニケーションを取りながら合同で作品制作を行った。本学の学生は Fashion と Food をテーマとしたサブグループに参加した。

### Fashion サブグループ

Fashion サブグループでは、日本人学生4名とロンドンの学生が遠隔で連絡を取りながら、主にアイデンティティと「脱植民地化」の関わりについて調査し、「自分らしさ」とは「自分らしいファッションとは」というテーマでそれぞれ日本とロンドンでフィールドワークを行い、そこで得たインスピレーションを元に作品制作を行った。コミュニケーション言語は英語だったが、日本人学生同士は日本語で

制作を行い、翻訳アプリなどを利用しつつロンドンの学生と連絡をとりあい、写真を WhatsApp など で共有し、ロンドンからの画像を反映し日本で制作をすすめた。完成した作品として、ビニール素材の透明の上着のポケットに様々な素材でその人らしさが「垣間見られる」作りをすることで、自らを含む様々なアイデンティティの葛藤を表現した作品を制作した(図6)。フィードバックでは、作品を紹介する動画の表現方法が定型化されたファッションショーのようなつくりとなっており、より最終的なアウトプットの方法で創意工夫があればよかったのではないかとの意見もあったが、短期間でグループのコンセプトをオリジナリティあふれる作品に仕上げたことが評価された。

### Food サブグループ

Food グループでは、本学学生2名とシンガポールの学生が1名の計3名でグローバル化する寿司をテーマに「The Bastardization of Sushi」というタイトルで Zine (ジン・小冊子) を制作した(図7)。本学学生2名は国際文化学部の学生であり、主に海外で食べられている寿司 (Sushi) に関してリサーチしディスカッションを通じてアイデアや冊子の内容へのコンテンツを提供し、グラフィックを専攻するシンガポールの学生がイラストレーションや紙面のグ



#### 【作品制作のコンセプト】

“インタビューを通して知り合った人たちの内面や、コミュニケーションを通してしか見えてこない物語をファッションで表現することに挑戦しました。物理的なモノを作る際のメンバー間の物理的な距離の問題を、資料をデータで送ってもらい、それをプリントアウトしてコラージュすることで表現しようと試みました”

#### 【脱植民地化】

“作品制作に際するインタビューを通して、私たちはこれまで他人に対して勝手な思い込みをしていたことに改めて気づかされました。インタビューを通して、その思い込みを壊すことができました。この思い込みが、無意識のうちに他人を見る目を植民地化しているのですが、この身近な思い込みからくる偏見を伝えることで、脱植民地化の第一歩を踏み出せるのではないかと考えています。”

図6. Fashionサブグループの作品と作品紹介

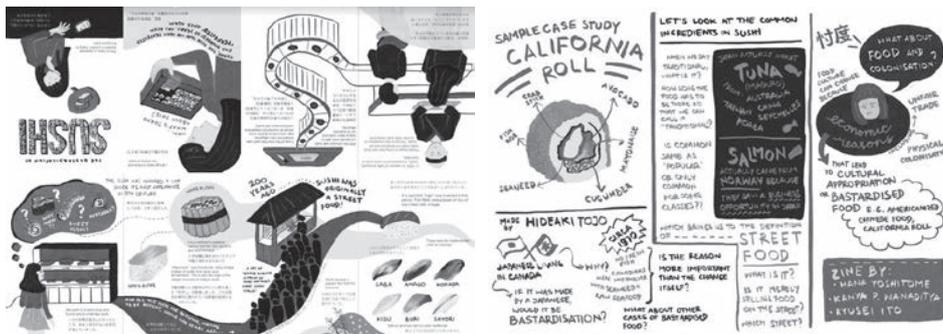


図7. Foodサブグループのジン「The Bastardization of Sushi」

ラフィックを担当した。A4一枚の紙を折ることで出来上がる冊子は最終発表の際にも遠隔地でそれぞれの学生が簡単に印刷して手に取ることができ、冊子のデザインが評価されると同時に、アイデアについても脱植民地化との関わりから良いテーマ設定とリサーチが行われた点が評価された。

## 6. 多文化環境での協働経験

ここでは、オンラインでの多文化環境での学びにおいて、本学の学生がどのような経験をし、個々が感じた学びと成長はどのようなものであったのかについて、プログラム前後で実施した異文化間能力の自己評価アンケート結果を示す。

### 1) 個々の参加意義

サマースクールの参加するにあたって、個々の協働経験の意義を把握するために、自由回答のアンケートを行った。アンケート項目と回答を以下に示す(表3)。

学生の多くが、英語を利用した多文化環境における学びの機会に参加すること自体が一つの挑戦と感

じていたことが分かる。実際、語学やコミュニケーションに対する苦手意識がありながら、サマースクールを通して海外の学生と共に作品作りをすることに興味を持ち、積極的に取り組んだ様子が伺えた。同時に、コミュニケーションの不安から、「間違えていたらどうしよう」「分からなかったらどうしよう」といった不安も多く聞かれた。こうした不安を克服しコミュニケーションが取れたことを喜ぶ意見や、関わりのできた海外の学生と連絡をとりあいたい気持ちなども生まれたが、同時に一部の学生は、自らの意見を上手く表現できないもどかしさについても語られており、個々のアンケート結果にも現れている。また、学生の関心は総じて英語や作品制作がキーワードであるが、個々の学生の回答を前後で比較すると、それぞれ自らの個人的な目標を設定して参加し、異なる学びを得たと感じていることが伺える。学生にとっての参加目的、意義が多様であることは、今後同様のプログラムを企画する際にも考慮すべき点であると考えられる。

### 2) 異文化間能力

本サマースクールのような多文化環境において協

表3. アンケート項目と各学生からの回答

事前		事後	
質問内容	1. Summer School で身につけたい能力	1. サマースクールで挑戦できたこと 2. できなかったこと 3. サマースクールで実感した自身の能力 / 得意なこと 4. サマースクールで実感した自信の不得意なこと 5. 今後、身に付けたい / 伸ばしたい能力	
回答			
学生1	1. 英語力と自信	1. このサマースクールに参加することが大きな挑戦だった。 2. 挑戦したのにも関わらず、自分の英語を気にして発言できなかった。 3. 何ができないかがわかるようになった。 4. わからないと固まってしまう。 5. 伝えようとする意思	
学生2	1. 作品を作る力	1. 知らない人々にインタビューする 2. 映像を活かすこと 3. 作品を作ること 4. 自分にとって適切な課題を選び取ること 5. たくさんの映像スキルを身につけること	
学生3	1. 違う言語を話す人に自分の考えを伝える力を身につけたいです。	1. 自分の意見を積極的に出すことができたかなと思います。 2. 自分の意見があるのに、間違えてたらどうしよう、分かってもらえなかったらどうしようと、話す前から色々心配事を考えてしまい、結局時間が過ぎて意見が言えなかったということがよくありました。 3. 前向きな考え方を保つ力です。 4. 分からないのに、曖昧な返事をしてしまいました。なので、正直に分からないと言う力がないかなと思いました。 5. 英語能力と、消極的にならず、恐れず意見を出す勇気です。個人的に英語のリスニングを続けるのと、大学の授業などでも、積極的に質問するなど、練習を重ねる事が必要だと思います。	
学生4	1. 異文化の混ざり合いの中で一つのものを作り上げていく力	1. チームワーク、英語で理解して英語で喋ること。 2. たくさんの海外の学生さんとの交流。ゲストスピーカーの講演で色々意見を言えなかった事。 3. 英語で喋ろうとすることがしやすくなりました。いいメンバーに巡り会えば、協力しあってプロジェクトを達成することができること。チーム内でのファシリテーター的なポジション。 4. 一度話し合っただけで合意を得られたと思っていたことが、覆されることがやはり苦手なことが分かりました。 5. 英語でのテーマの理解とすぐに熱くならないこと。	
学生5	1. 他者の気持ちを想像すること	1. 英会話、共同制作 2. 自分をアピールすること 3. 感性が豊かで、専攻分野に限らない様々な表現ができること 4. 英語で自分の意見を伝えること 5. 英会話能力。今回のサマースクールでできた海外の友達と連絡をとり続けたい。英語の試験も調整していきたい。	

表4. 異文化間能力に関する質問項目

項目	具体的な質問
姿勢	1.自身と他者の言語や文化の類似点や相違点に敏感であると思う。 2.言語や文化の類似点や相違点を理解することに興味を持っている。 3.言語や文化に関して質問する意志がある。 4.馴染みのない言語的・文化的な特性や慣習に（段階的に）親しみを覚えることができる。
準備	1.コミュニケーション（言語的/非言語的）を行う準備ができています。 2.コミュニケーション（表現すること/理解すること/相互交流すること）に自信がある。 3.理解できないこと/不安を受け入れ、克服する準備ができています。
異文化交流 知識	1.非言語的なコミュニケーションの役割を知っている。 2.言語や国の境界線が一致しないことを知っている。 3.自身の文化的特徴を知っている。 4.自身以外の文化的特徴/慣習を知っている。 5.文化間においてステレオタイプがあることを知っている。 6.文化の差異に対する自身の反応を知っている。
理解	1.海外出身者の文化的背景や特質について認識することができる。 2.海外出身者の文化的慣習の相違点の気付き、比較することができる。 3.文化の違いによって生じる誤解の原因を分析することができる。
説明	1.自国の文化の特徴について、海外の人々に対して説明することができる。 2.文化的多様性について、長所/短所/困難などを説明することができる。
交流	1.言語的/非言語的な能力を駆使しコミュニケーションができる。 2.必要に応じて助けを求めることができる。
学び	1.異文化体験から、自分の異文化対応能力を高めることができる。 2.自身の失敗から学ぶことができる。 3.自身の語学学習や異文化の学び方を確認し、改善することができる。 4.自身の語学学習能力や異文化を学ぶ能力に自信がある。

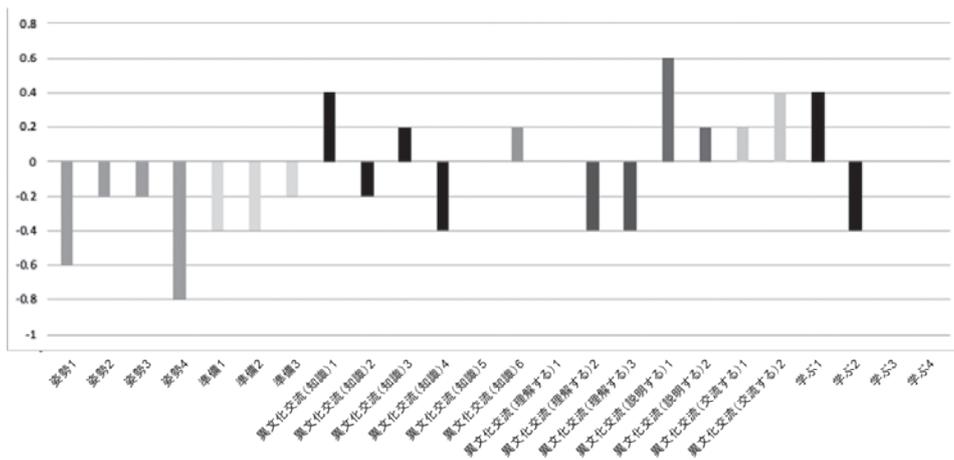


図8. 異文化間能力に関するアンケート回答の前後比較

働するためには、「異文化コミュニケーション能力」が求められる。異文化における能力とは、主に「語学力」と「異文化間能力」があり (Bryan 1997)、特に本アンケートでは、「異文化間能力」に着目した。異文化間能力とは、「異文化のさまざまな状況の中で、適切でふさわしい行動がとれること」であり、「異文化の人々と相互して、自分の目的が達成できること」などといわれている (石井他 1997)。今回はヨーロッパ評議会のフレームワーク (Framework of Reference of Pluralistic Approached to Language and Culture) (Candelier et al. 2013) を参考に、今特に異文化間交流に求められる「知識」「態度」「スキル」を中心にアンケートを設定した (表4)。そうである (4)、おおよそそうである (3)、あまりそうではない (2)、そうではない (1) で回答を求めた。サマースクール開始前後において、本学学生にアン

ケート調査を実施し、前後両方を解凍した5名を有効回答とした。

アンケートの結果の前後を比較すると、個人差もあるが必ずしも肯定的な回答への変化だけではなかった。全体的に回答が、肯定的に転換した質問、否定的に転換した質問がみられた (図8)。なかでも、肯定的に転換した回答が多かったのは、実際の「異文化交流」において説明する (説明1、説明2)、交流する (交流1、交流2) の質問項目であった。これは、実際の経験を通じてできるようになった、また、できることを再確認する機会であったことが考えられる。逆に否定的な回答に転換した質問は、姿勢 (姿勢1~4) や準備 (準備1~4) である。これは、実際の異文化交流経験を通じて、思ったように意思疎通できないなどの体験を通じての実感が反映されてい

ると考えられる。最後に、時差の関係で日本では夕方からのオンライン接続としたため、午前中に接続してくる海外の学生に比べ、一日を終えた学生たち疲労やモチベーションもこうした回答に影響しているかもしれない。より複合的な環境や条件を前提に、学生達の成長や気持ちの変化について調査していく必要があるだろう。

## 6. まとめ

本稿では、多文化環境における協働を視座に、2021年の夏に筆者らが本学で実施した Shared Campus のサマースクール「Streets – 街路で考える –」を事例に、①オンラインでの協働を促進するためにどのようなプログラムを企画運営し、どのような工夫をしたか、②本学学生に対してどのようなサポートを行ったか、③このようなプログラムに特化した学生の学びと成長はどのようなものであったかを示した。

オンラインのプログラムは、出身や所属が学生や教員が多地点から接続が可能となり、対面では実現が限られる国際的、学際的なメンバーの参加によるグループワークや制作活動の場となり得る。しかし、オンラインでの実施は、時差、オンタイムでの接続時間の限界、参加者同士のコミュニケーションが限られるなどの制限も多く、オンラインプログラム独自の設計や工夫が必要となる。例えば、多様な学生が参加するプログラムの実施においては、すべての参加学生が関与できる共通テーマの設定、テーマの理解を促すためのプログラム構成が必要となる。また、学生と教員が一度にオンラインに接続してできる活動は限られるが、異なる地点からの実況と伴う講義、個人制作やグループワークの時間、個別での教員との面談時間など多様な活動の組み合わせが効果的である。また、オンラインで円滑なコミュニケーションをとるためにも、対話をするための zoom での接続のみならず、多様な SNS の活用も有益であった。特にオンラインでのグループワークや個人ワークなどを教員側がサポートし、実際の作品制作につなげることができたことは、こうしたオンラインでの多分環境での学習を促進する上で、一つの成果であるといえよう。

また、オンラインでの海外の大学との共同プログラムは、通常英語で実施され、グループワークやディスカッションを求められることが少なくない。英語でのコミュニケーション能力が求められ、また日常

の教育環境とは大幅に異なるため、学生が適応し、充実した学びを得るために教員のサポートが有効であると考えられる。特に、オンラインのプログラムは対面より語学力が要される。学生の不安を軽減し、前向きな参加を促すために語学面でのサポートは不可欠である。プログラム開始前の実施準備、実施中の逐次通訳や解説、翻訳アプリの紹介など語学に直結するサポートに限らず、教員と学生、また学生同士の関係づくりなども含まれる。プログラム参加中の不安やなやみを共有できる場づくり、対面で学生と向き合い、語学だけではなく英語でのディスカッションや講義を理解できなかった時の不安を取り除きつつ、語学面、学習面、精神面でフォローアップすることにより、ハードルが高いと感じられるプログラムでの完遂できるようになる。

最後に、このようなプログラムに特化した本学の学生の学びと成長はどのようなものであったかについて、作品作りという明確な目的のもとに英語を活用して学ぶ、という本プログラムの趣旨が、語学習得だけでなくオンラインの多文化環境における学びの機会として非常に有用なものであることが分かった。作品制作という明確な目的とゴールが設定されていたため、学生が個人、グループで真剣に取り組むことができ、語学面で思い通りに表現できなかった時も、作品を通じてコミュニケーションを計ろうとする姿勢が見られ、学びが作品という完成した形で発表できたことが学生たちの達成感に繋がった。一つの目的のために全員が参加し協働しながら、語学を含めて思考錯誤する姿勢が育めた点は、本プログラムの大きな成果だったといえる。しかし、学生によってはこうしたオンライン、かつ英語、多文化という学びの経験に対し少なからず身心ともにプレッシャーを感じる局面が見受けられた。今後の課題として、引き続きこうしたプログラムを通じた学びの機会を学生に提供していくと同時に、オンラインの多文化環境におかれた学生が自らの語学やコミュニケーション能力をより良い形で伸ばせるようなプログラムやツールの使い方、授業や講義の設計の仕方のバランスを検討していくことが必要だろう。

本事例のようなプログラムは、取り扱われるテーマに関する知識を深め、創造活動に参加するのみならず、多文化環境による協働を行うことによって、個々の学生に学びと成長を促す機会であり、自己省察と経験を通じて自信を醸成しうる。こうしたプログラムは、様々な人、方法、機会の組み合わせによって実現する。こうした多文化コミュニケーションの

経験は、同様の組み合わせの再現を目指すものではなく、そこに参加する学生や教員が異なることで、限りなくいろいろな方向に展開できる可能性があることを示唆するものである。

FREPA - A Framework of Reference for Pluralistic Approaches to Languages and Cultures: Competences and resources. Concil of Europ. 2013

## 謝辞

アンケート調査は、京都精華大学の2021年度学長指定課題「シェアードキャンパスを通じた本学研究・教育の国際的活性化・フェーズ2」(代表：安田昌弘)の一環として実施したものである。本プログラムの実施にあたり協働した香港浸会大学・Evelyn Kwok氏、チューリッヒ芸術大学・Rada Leu氏、福田ペロ氏、京都精華大学・安田昌弘教授、水田拓郎特任准教授(当時)、Jennifer L. Teeter 講師に感謝する。

## 注釈

- 1 オンライン教育の実施と評価については2020年以降各大学より報告されている。例えば、親見、星野、太田(2021)やフンク(2021)。
- 2 Miro ボード  
2011年、CEOであるアンドレイ・クシド(英名: Andrey Khusid)によって開発されたオンラインのビジュアルコラボレーションプラットフォーム。当初開発されたホワイトボードツールは「RealtimeBoard」と名付けられた。現在アムステルダムとサンフランシスコに共同本社を置き、世界各地に拠点を置いている。

## 参考文献

- 石井敏・久米昭元・遠山淳・平井一弘・松本茂・御堂岡潔 編. 異文化コミュニケーション・ハンドブック. 有斐閣選書. 1997.
- 新見有紀子, 星野晶成, 太田浩. "ポストコロナに向けた国際教育交流 - 情報通信技術 (ICT) を活用した新たな教育実践より -". 留学交流. 2021, Vol.120, p.26-41
- フンク・カロリン. "新型コロナ時代における広島大学の国際交流教育の工夫". 新型コロナ時代における大大学教育 - 第48回(2020年度) 研究員集会の記録 -. 広島大学高等教育研究開発センター 高等教育研究叢書. 2021. p.19-26
- Byram, M. Teaching and assessing intercultural communicative competence. Multilingual Matters Ltd. 1997
- Candelier, M. (coordinator), Grima, A.C., Candelier, M., Castellotti, V., Pietro, J., Lőrincz, I., Meissner, F., Molinié, M., Noguero, A., & Schröder-Sura, A.